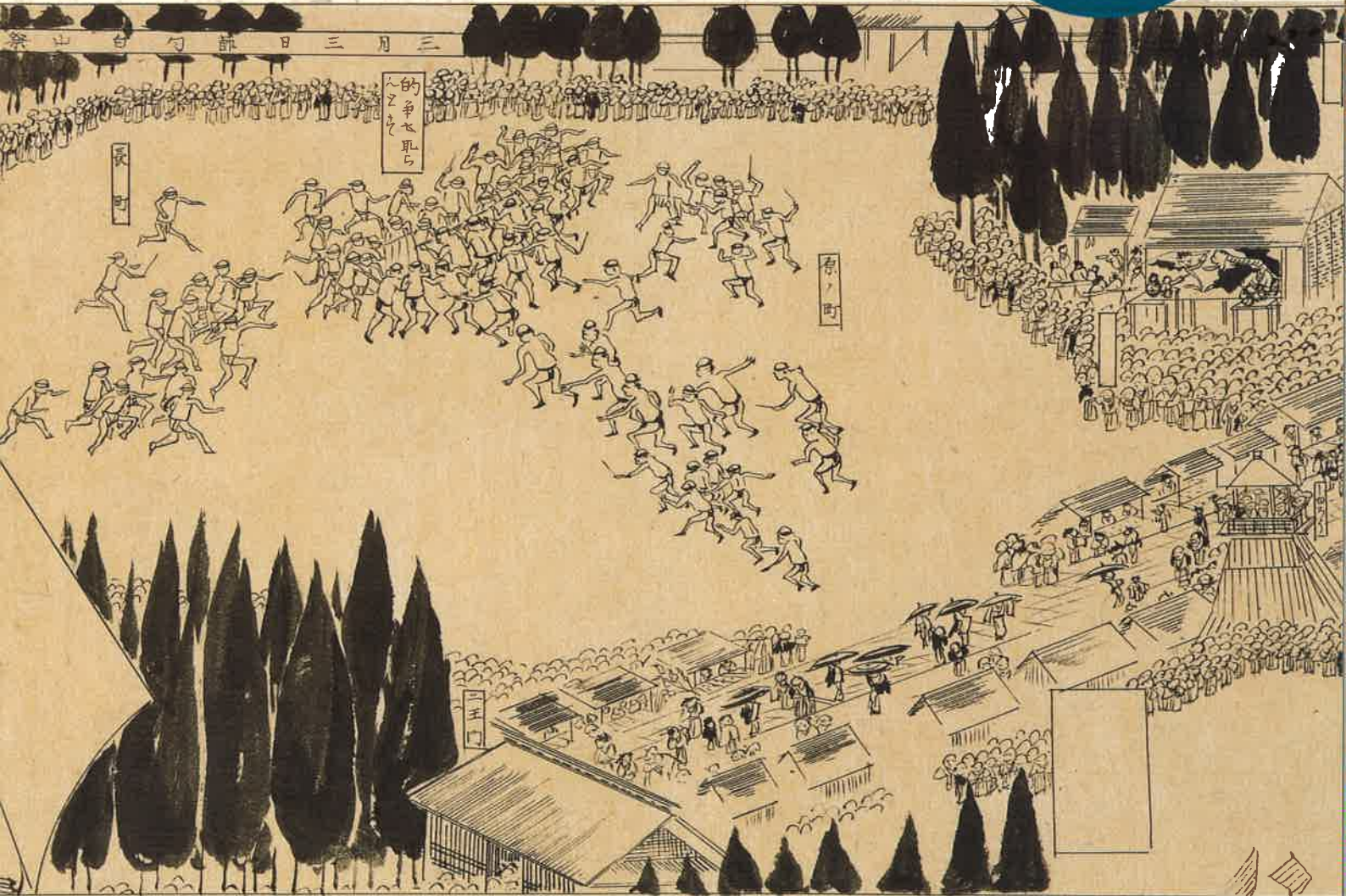


せんだい

市史通信

第5号

仙台市博物館
市史編さん室



『仙台年中行事絵巻』(部分) 仙台市博物館蔵

せんだい
昔

白山神社のお祭り

昔、3月3日は木ノ下白山神社祭の日でした。嘉永3年(1850)前後の成立と推定される『仙台年中行事絵巻』には150年前、江戸時代のにぎやかな白山神社祭の様子が描かれています。

仁王門を入ると左右に露店が並び、ほんぼこ槍を売る店があります。ほんぼこ槍とは柄の先にひょうたんをつけた火伏せのまじないで、これにちなんで白山神社祭礼を「ほんぼこ祭」と称しました。境内の広場では「的ばやい」がおこなわれ、大勢の人たちが周りを取り囲んでいます。

的ばやいは神事の一つで、その他に舞楽、神楽、流鏝馬(やぶさめ)などがありました。「的ばやい」とは、国分氏の領地であった原町(宮城郡)と長町(名取郡)の若者たちによって流鏝馬(やぶさめ)の的を争う行事です。豊作を占う神事で、的を取った方がその年の作柄がよいとされていました。

白山神社は、奈良時代に建立された陸奥国分寺の鎮守であったと伝えられています。中世には、この地方を支配していた国分氏の保護を受け、国分三十三郷の氏神でもありました。やがて国分氏は勢力を失い、この地には伊達政宗が仙台の町づくりをしますが、白山神社は国分氏の旧臣が中心になって神事を行ってきました。現在、祭の様相は変わりましたが、舞楽や流鏝馬など古来の伝統的神事が行われています。

白山神社の神楽は丹波流とか丹波神楽と称されてきました。神楽の起源は京都の丹波地方との関係が考えられましたが、京都方面の神楽とは芸風が異なっていて、その由来は謎でした。ところが近年発見された天保7年の記録で、神楽の師匠の名が湯原丹波掾であることが分かり、この謎の一つの答が見つかっています。白山神社の神楽は一時中絶しましたが復興し、現在、国分氏の旧臣の家系という氏子有志によって4月の第3日曜日に演じられています。

仙台開府 400年

仙台城と城下町 ～そのあゆみと特色～

慶長5年12月24日（西暦1601年1月28日）伊達政宗は仙台城の建設に着手しました。築城にともなって城下の町づくりも行われ、新たな都市が誕生することになりました。仙台開府です。

もともとこの付近には1000体の仏像（千体仏）が祀られていたことから「千体（せんたい）」と呼ばれていたと伝えられています。また、青葉山の地には、中世にこの地を治めていた国分氏の居城である千代城が築かれていました。この千代城の跡地を自らの居城に選んだ政宗が、漢詩の一節から「仙台（臺）」の文字を選び、新しい居城と城下町の名前としたのでした。

城下町が建設された場所はいちめんの荒地だったと伝えられており、町づくりはまさにゼロからのスタートでした。

城下町の建設にあたっては、まず東西の基準ラインとして大町の町並みを、南北の基準ラインとして奥州街道を設定し、この基準ラインにそって碁盤の目状の区画をつくり出していきました。大町と奥州街道の交差点は芭蕉の辻、あるいは札の辻と呼ばれ、城下町でいちばんにぎわう場所となりました。

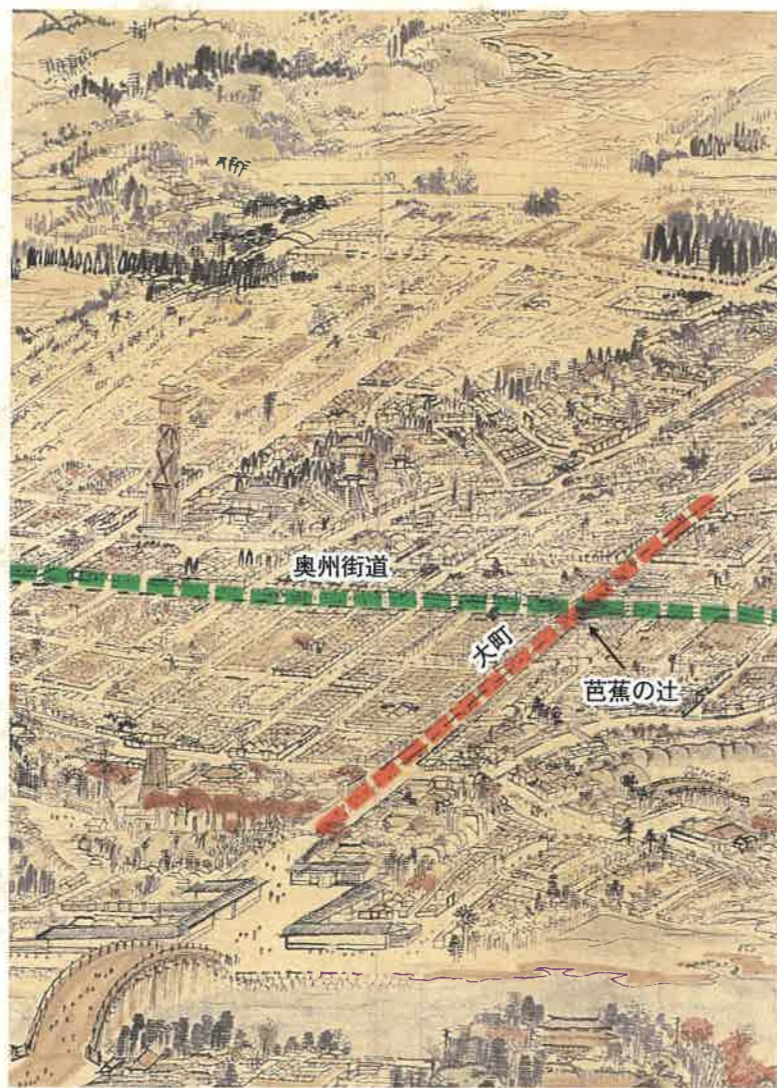
城下町では、侍屋敷が置かれた地区と町人が住む場所は明確に区別されていました。それぞれの名称も、侍屋敷のある所はそこを通る道の名称を用いて「～丁（ちょう）」と称され、足軽などの下級武士や町人、職人が住む所は「～町（まち）」と呼ばれるのが原則でした。例えば、現在、仙台を代表する商店街となっている一番町は、江戸時代は「東一番丁」と呼ばれ、中級武士の屋敷が並ぶ閑静な所でした。このほか、道の名称には「～通（とおり）」というのがありますが、これはその道を通じる先の地名をとったもので、「南町通」は南町の中を通る道を指すのではなく、南町に通じる道の一つに付けられた名前なのです。

こうして産声を上げた仙台は、徐々に拡大を遂げていきます。まず、政宗が晩年に居所とした若林城の周辺には小城下町が造られましたが、若林城の廃止後にそのかなりの部分が仙台城下に組み入れられ、城下町は南東へ大きく発展しました。2代藩主忠宗の時代には、東照宮の造営などにもない、北東に拡大しました。そうして開府から約100年を経た元禄年間には人口5万人を超す、全国有数の都市ができあがったのです。

城下町・仙台の大きな特色として、武士の多い町であったという点があります。人口では7割弱、城下町全体に占める武家屋敷の面積も7割を超していました。こうした武家屋敷や神社仏閣の境内には多くの樹木が植えられ、城下町は深い木立に覆われていました。「杜の都・仙台」のルーツをここにみることができます。

仙台城下町 Q&A

Q：侍は毎日仙台城へ出勤していたのですか。
A：侍は必ずしも役職に就いているとは限りません。仙台藩の場合、中級以上の侍の多くは、仙台城下と領地の両方に屋敷を持っているのですが、役職に就いていない侍は、領地に住んでいることが多いのです。また、役職に就いている場合でも、仕事のために仙台城や藩の役所へ出勤するのは数日に1回の場合が多いようです。侍は自由時間が多かったようですね。



「明治元年現状仙台城市之図」(部分) 仙台市博物館蔵

仙台城下町 Q&A

Q：仙台にも町火消しや目明かしはいたのですか。
A：仙台の町火消しは、はじめは各町が人数を出し合っで交代で行っていたようですが、段々と特定の家に固定化し、江戸時代の終わり頃になると、二日町と肴町に合わせて3組の町火消しがあったそうです。火消しの中には目明かしをかねて、全国的にも「親分」として名が知れ渡った人もいました。その目明かしですが、江戸などと同じように仙台でも町奉行の下に所属し、軽犯罪などの取り締まりに当たっていました。彼らの多くは博徒であり、多くの子分を持っていたこともあったようです。

仙台城下における 資源回収

最近、なにかと資源の回収が話題になりますが、江戸時代は高度に資源回収が行われていたことが近年の研究で段々と分かってきました。ここで、仙台城下における事例をいくつか紹介してみましょう。

まず、現代と共通するものとして、古紙の回収を挙げることができます。古紙を原料として再生紙を作ることは、実は古くから行われており、古紙は紙生産における重要な原材料の一つでした。

城下町では、藩の役所や商家から不要になった帳簿類などが大量に廃棄され、まさに資源の宝庫だったのです。仙台では紙の専売権を許されていた田町が、江戸時代中期以降、城下における古紙回収とそれを材料とした再生紙生産の権利を持っていました。一方、仙台近郊において政宗時代から紙の生産を行っていた名取郡柳生村の人たちもこの宝の山を見逃しませんでした。田町の町人と柳生の村人は城下の古紙をめぐる激しい争奪合戦をしていました。一部の都市で古紙の余剰が見受けられる現在の状況と比較すると興味深いですね。



さて、近郊の村の人たちと城下とのつながりでもう一つ忘れられないものとして、排泄物の回収があります。人糞は肥料として最高のものだったので、村人たちは農作物をお礼にして町から人糞の回収をしていたのです。江戸時代における仙台では回収の様子の詳しいことは分かりませんが、「ダラ桶」と呼ばれた細長い容器に人糞を入れ、馬の背に結わえて運んでいたようです。上の絵は城下の表小路（今の市役所前を東西に走る通り）で馬が暴れて「ダラ桶」が散乱している様子を描いたものです（仙台市博物館蔵『仙台中行事絵巻』より）。

明治時代になるとこれが改良されて「よったる」と呼ばれる入れ物になるのですが、馬車に載せられた「よったる」が道を行く光景をご記憶の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

仙台城下町 Q&A

Q：城下町の道はどの位の幅だったのですか。
A：町人町では大町の通りが一番広く、約9メートルでした。奥州街道に沿った国分町・南町等が約6メートル位でこれに次いでいました。また、侍町では東一番丁や東二番丁が6メートル前後で、片平丁はもっと広がったようです。しかし、大部分の道は3～4メートルで、今の道と比較するとかなり狭く、しかも道の真ん中には四ツ谷用水などの堀が流れていることが多く、実質的にはかなり狭かったようです。

仙台城下町 Q&A

Q：城下町と村々の境はどうなっていたのですか。
A：城下町と村々の境界は、行政上ではきちんと区別がありました。実際には目印となるような境界線はなかったと思われます。ただし、街道筋の場合は、扉のついた「丁切（ちょうぎり）」という柵が設けられて境をはっきりさせていたようです。ちなみに、村人たちにとって城下町は一種特別な地域だったようで、城下町に入る時には、城下町の入り口でそれまで履いていたわらじをぞうりに履き替える習慣が明治時代まで残っていたそうです。

既刊紹介

資料編3 近世2 城下町

仙台の「城下町らしい町並み」といわれた時、あなたはどれぐらい思い浮かべることができるのでしょうか。江戸時代、仙台は大規模な城下町であったにもかかわらず、戦災や開発によってその景観はあまり残っていません。そのような中でも失われず、大事に伝えられてきた古文書が、城下町のかつての姿を教えてくれることがあります。

資料編の刊行にあたり「城下町」をテーマに、さまざまな調査が行われました。その調査の過程で、これまで紹介され

てこなかった重要な資料も多く見つかりました。この本に収録された資料の中には、現在では城下町を知る上でなくてはならないと考えられているものがたくさんあります。

たとえば町の統括をする役人が毎日どのような仕事をしてきたのか、どんな決まりに従って文書を作成していたのかをまとめた冊子は、町の運営を知る基本中の基本となっています。また、藩主から町人まで総出で見物する東照宮祭礼の準備や、そのにぎやかな行列の様子はどうだったのかといった当時の町がのぞけるような資料もいっぱいあります。

こうした資料を読んでから、「城下を立体的に描いたもの」を中心に城下の様々な絵図が掲載されている別冊付録をみると、城下を行き交う人々が動き出してみえるかも？

300年祭

今年の仙台開府四百年を祝って様々な催しがありますが、ほぼ100年前の明治32年(1899)5月23日には、川内に特別な会場を設けて、「仙台開設三百年祭」が華々しく行われました。

お祭りの神輿が青葉神社から川内に渡り、大名行列のような武装行列も見られました。市内は国分町や新伝馬町などによる趣向を凝らした11の山車でにぎわい、また、肴町では明治3年に絶えた「浜祭り」を復活させ、有志が魚の格好をして市内を踊り歩きました。会場付近では能や狂言・相撲・競馬などが催され、たくさんの花火も打ち上げられました。学校や軍隊は臨時休業となり、会場を訪れた生徒には紅白餅が配られたようです。

商店街では期間限定で大安売りをを行い、観光客獲得の商戦も展開しました。

23日から25日までの人出は推定約5万人で、当時の仙台市の人口(約7万1千人)の約7割にあたる大混雑。そのため、仙台警察署では宮城県下の各警察署に100名の応援を要請し、市民の安全を図ったのです。

日清・日露戦争の狭間で行われたこの全市をあげてのお祭りに、市民は日常を忘れ喜んだのかもしれない。



川内会場での祭典の様子 東北新聞(明治32年5月25日)より

仙台市史「でまえ講座」開催

「仙台市史」編さん事業の一環として、太白区中央市民センターで第1回仙台市史「でまえ講座」が開催されました。テーマは長町とその周辺の歴史。2月24日(土)、3月3日(土)の2回にわたって、仙台市史の執筆陣4名が講演を行い、各回とも約85名の方にご参加いただきました。



施設探訪 青葉城資料展示館

仙台市史で使いたい写真や資料が博物館にないとき、必要なものはよそからお借ります。また、資料が見つければ調査にでかけたりもします。このコーナーでは、市史編さん事業の過程で訪れた施設をご紹介します。

青葉城資料展示館は、仙台城(青葉城)本丸跡に建つ本丸会館内に昭和54年にオープンしました。この館の特長は、コンピュータ・グラフィクス(C・G)によって復元された仙台城。絢爛豪華な大広間「千畳敷」や障壁画・欄間の彫刻などの装飾物、重厚な御成門などがリアルに再現されており、往時の豪華な仙台城の様子を知ることができます。C・Gの案内役は伊達政宗と重臣片倉小十郎。贅沢な散歩をしている気分になれるかもしれません。

このほか、伊達政宗の書状などの文書類や政宗の長男秀宗にはじまる宇和島伊達家の婚礼調度品など、多くの資料が展示されています。春の仙台城にちょっと足を伸ばしてみたいかが。



青葉城資料展示館
仙台市青葉区天守台青葉城址
☎022-222-0218 [P]250台
9:00~17:00(12~3月は16:00)無休
入館料一般700円 中・高生500円
小学生以下300円(団体割引あり)
仙台駅から市営バス青葉城址循環線で
青葉城址下車徒歩1分

既刊
好評発売中

仙台の歴史を完全収録 各分野ごと続々登場

【通史編2】古代中世(新刊)

【資料編4】近世3 村落(新刊)



●発売元/宮城県教科書供給所
〒980-0021 仙台市青葉区中央二丁目9-22
TEL/022-222-5052 FAX/022-222-5056
県内主要書店で発売します。本の発送をご希望の方は、上記にてお申し込みください。なお、郵送の場合のお支払いは、配本時に同封する振込用紙でご入金ください。
●詳しくは、仙台市博物館市史編さん室までお問い合わせください。
仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL/022-225-0814 FAX/022-216-1830

【通史編1】原始

【資料編1】古代中世
【資料編2】近世1 藩政
【資料編3】近世2 城下町
【資料編5】近代現代1 交通建設
【資料編10】伊達政宗文書1

【特別編1】自然
【特別編2】考古資料
【特別編3】美術工芸
【特別編4】市民生活
【特別編5】板碑
【特別編6】民俗

【通史編】3,000円(税込み価格)

【資料編】4,000円(税込み価格)

【特別編】6,000円(税込み価格)

板碑のみ 5,000円(税込み価格)

分売もできます

仙台市史全30巻

◆通史編/原始・古代中世・近世1~3・近代1~2・現代1~2
◆資料編/古代中世・近世1~3・近代現代1~4・伊達政宗文書1~3・慶長遣欧使節
◆特別編/自然・考古資料・美術工芸・市民生活・板碑・民俗・城館・文化芸能史・地域史

あとがき

編さん室より

今回は仙台開府400年に関する話題を中心にお届けしました。節目の年ということで市内では開府関連の企画が相次いでいます。その中で独自のカラーを出せればと思ったのですが、いかがだったでしょうか。

せんだい 第5号 市史通信

発行年月日/平成13年3月31日
編集・発行/仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL/022-225-0814 FAX/022-216-1830
URL <http://www.city.sendai.jp/Section/Kyouiku/Museum/>